

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	酔盞：文苑
Author(s)	鼓樂
Citation	龍南會雜誌， 1 4 5： 4 4 - 6 7
Issue date	1912-05-10
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/6306
Right	

醉

盞

鼓

樂

一

「明日からだ。」藍光の浪に燃ゆる静かな磯の方に蒼い沈黙と臃氣との面帕を徹して、踵こぼくと歩んで行くとき私の胸に慙こゝろ麼想なひが湧いた。峻險しい崖を下り、白砂づたひに、蕭しめやかな匂ひに満ちている潮流に面したとき、再び是の言葉の意味をなにげなしに囁いた。廣い青田を縫うて遙かな松林から漂ふ強い鋭い松脂の香が鹽の香と交つて、柔嫩やわらかかい刺戟を興へる。餘光をうけた海面は陰つた志賀島の斜面を蘸して、映つるものは、眞黒な睡りに誘はるゝ様に震へてゐる。「明日からだ」。私はまた、幹の高い松が海風に染んだ黒緑の鎗のやうな葉先を幾重にも翳し交はしてゐる下に、冷かに流れ行く流れから眼を移した時に言つて見た。……空には雲が二つ三つ流れてゐる。四圍は徐々そとくと裾を拂ふ風に藍色に錆びて行く。私は呵々と笑ひ出した。笑の表情がまだ充分に自分の顔から去らぬ間に、冷い思ひが端なく心を襲つた。

「無意味な言葉だ。」

が考へて見ると是程寂しい言葉はなかつた。遣る瀬ない興奮に續いてくる疲勞の間から頸をだして、「明日」といふ氣まぐれな豫期を追ひ初めたのは近頃のことではなかつた。この疲れのために、酒と無頼とに跨つて浮氣も戀も仕盡したやうな顔を襲つてきたのではなかつたか。と思ふと假面といふものの尊さが泌しみ泌しみと想はれた。

私は常に恁麼ことを想つてゐる。譬へ單純な生活であつたにせよ、異象と怪異との生あり命ある魅力をうれば澤山だ。薄暮の空に蕩揺つてくる「雲の奇」、廣い廣い明方の潮が誘つて行く「水の奇」を感じ、または足跡もない松林の中にあつても、滯氣に流れてゐる松脂の香が深い胸臆を徹して、古い時代の怪異やまだやつてこぬ新しい世の荒誕を囁いてくれれば澤山だと……………

が女達の織い羽の顫へ。仙人掌の花のやうな俤。人生と理想と秘密と。かゝる凡てのことを感じ總てを経験したやうな心持で、靜な沈滞した疲のあひだに横つてゐることは堪られなかつた。いつも官能の作用を鋭敏に削つて、有頂天な誘惑の甘みに浮びたいといふのはこの世で最も望ましいことであると想ふ、それで洪水のやうに漲る情慾で太陽を抱きたい程の緊張で、この世を通り越すことができたなら、誇張荒誕、奇怪、の衣をかつて、海豹の皮のカラーやカフスを偲め、半人半馬に乗つてコビの砂漠の月を眺めるのよりどれだけ愉快か知らぬ。が貧弱な情緒をしかもつてゐない私には、現實をかけ離れた不可能のこのみを夢想するのは最も愉快なことであつた。荒誕、隱喩、怪異は私の人工的な世界に光を放つてなくてはならぬものである。私にとつて人生は深刻でも痛切でもない。譬へば晩春初夏の風に駕して行く蒲公英の種のやうな軽い輕いもので、水よりも淡いものゝ中に溶けて行くものであつた。……………歩む足下に白い砂の嚙まるゝ音が聞える。波高、い玄海は松林の向ふから靜かな幕を破つてくるものゝ、この出島に擁せられた博多灣は、滑かに皺も立てず埠頭の小さい蒸氣は石炭の積入れに忙はしく、漸つと四五町へだつた方から人夫の掛聲が明日の空をうかがひ遠い遠い港を慕ふやうにひびく。志賀島の蔭つた斜面の上に撒つてゐる漁家には小さい篝火が光り初めた。

「もう少し歩いて見よう」

私は夏とは云ひながら冷たい潮風に吹かれ、制し難い心を抱いて、地面をしかと蹈しめ、松原を横ぎつて玄海のかたを臨まうとした。あたりは小さい密集した松に白い砂ばかり、其の間に落付いた重みのある様子を以て軌道が走つてゐる。ひつそりとして寂しい寺院のやう、松の葉影が餘光にふれて白衣の肩に影をたれる。こゝに絶えてかなたに上る虫の音は無聲にまさる寂を感じしめる。社會の暗室を通じ自分の存在を初めて眺めるやうな趣に耳をかたむけると、胸の内に湧いてゐるやうな玄海の動響が交つて歩いてゐる自分は影の様に想はれる。影だ。もう腕くにもあたらず、悶々でもいゝ。心臓には沈黙の指令が下つて終つて、逼りくる黄昏の中に、叢にかくれ潜んでゐる魔女が魅力ある譚を心の限り唱つたにしても、下り逝く太陽が中途にくづれて、その漲つた情慾の炎に凡ての人類を滅した時に、冷かに自然は木の葉一枚震はさぬとしても、それが亦何であらう……………彼方に「混沌」が喚叫して是方に「靜寂」が泣いてゐる。

かの不思議な微笑と白銀の顫音をたゞへたモナリザは私の傍に侍する。凝つた大氣の中には音もない風が執拗い夕闇をどかして総てがぼんやりと見わたしてくる。そのうちにモナリザは誇れるものゝ偷視をもつて、たれ、顫へる手先で神秘の扉をあけてくれる。風でない。浪の音でもない。天地は吐息の影に満ちて砂路の限り松林のかなたに彩なく暮れそむるのである。

私は自分の家の代々が葬られてある寺を想ひ出した。私の寺は阿蘇の連山が好く見わたる町はづれの高臺にあつた。寺域は随分廣くて、有名な誰れそれの墓もあつた。私は能く裏盆になると親父につれられて参り

をした。夏ではあるものゝ、七月の雨勝ちの空は暮參を終る頃になつて本堂の位牌に阿伽を汲む時分は微くさい寺院の内は、悔と念珠と幻の影に満されて、薄暗い。先づ燈籠に蠟燭をとぼして、暗の廊下をつたつて行く。雲間からのぞいてゐる星の光と虫の音は一所に窓から流れ込んで、暗に冴ゆる燭の焰は踏む足の躰にゆらぐ。深い奥間の佛像を燭の光に驚かせて右に廊を廻ると、燦ぶつた位牌が右と左に怪蛇の鱗のやうに重つてゐる。一旦燈籠を位牌の上にかけて今度は一人明りなく前後に暗い廻廊を渡る。さ、はな響に地の虫の音が一時止む。ふりかへると、歩いてきた廻り角には最も泣いて、歩み行く方はひつそり。木魚と鐘鉢が唸つてゐる様にも感じる。適かな方から讀經のさゝめきが壁を傳つてくる。小さい茶碗に漲るばかり阿伽を汲んで三度渡れば、虫の音は三度止んで、星の光は三度震へる。……………

臍げに危げに辿り行く足跡に水は漏れて儂なき一線を踏板の上に繪く、すかして見ると光つてゐる。去つて再び廻つた跡に蹉れて亂るゝ虫の音は壯んである。……………

今是の松原に立つた想ひと其の夜の想が同じものゝ様に感じる。私が黙つて尋ねて見ると何處ともなく沈黙つて答へるものがある。潮は漲れる許りに満ちてゐる。岸に小波の碎ける音が聞けば聞かるゝものゝ、櫓の音一つ響かない。夢みるものゝ、幸が確と虚空に繪き出されたやうに夏の夜は深まつてゆく。深い青みきつた深淵から兩手下水を壓し、搔ひやりながら浮び出るやうな努力をして私は立上つた、そして踵をかへして宿の方へ歩いて行つた。懷手をして物想ひに悩むやうに、松原を出、鐵路に沿つてもどの海岸にくると、長い堤の上に、矢張私と同じ浴客が海水浴帽をかぶつて涼んでゐる。佇んで語る人々の腰のあたりに銀地の團扇がばた／＼と鳴つた。

欄杆に凭て海を見る。月の出やうとする前の海面は黒いあひだにどこやら青い影を想はする様なところがある。が家影や松影を蘸してゐる水處は黒礪礪の光にねはれて燈火は蛇の様にその上を這つてゐる。月があるにつれて空氣はすん／＼と沈んで、薄い霧が立つ、遠い弓弦のやうに彎曲した箱崎のあたり黒絲のやうな松原が線を劃して、柳町の遊廊の燈火は、草叢にすだく螢のやうにかすかに緊張した歡びの線の音が唸つてゐる。たゞ何とはなしにうつとりと眺め入つてゐると衆星の下に眠つてゐる大きな黒船、平たく流るゝ潮、月代の餘光に烟つた嶋々の松の梢——凡てが心持のいゝ倦意を覺えて、何でも歴史の巷に這入りゆく時に添はなる感興を泛かべて睡眠りゆくものゝ幸を教へる様である。……がたゞ私のみ埋没された沈黙の墓場から立つて、生命の色に深い意味と光をついでくれるために、忘却の底から美しく力あるもの、のみが列をなしてきた。かゝるとき何で遙かに點灯つてゐる覺束ない燈火も温味なく、光りもなく輝くことができやう。

私は「明日からだ」といふ自覺的の香のある言葉がいつとなく胸の中に情緒の篩から落された「友よ」といふ字にかき改められるのを覺れた。

用捨なく、遠慮なく追憶の錘りがかゝると、起つては消え行く形體を弄んだ秋の心から生ずる官能的不安、歡樂の戰慄、有頂天な刺戟、を一つの象にとかし込んで、押しあひへしあひする考へが渾然として一方に高まつた。そして眩ひでもするやうな頭が、哀れな美しい韻律に變へられて終つて、香を放つ花の様に想はれたか私は何もかも、白狀してゐる様な氣分になつた。

「五月」のやうに水々しい柔順な少年の心は、同じ脈管を通つてくる様に、一つ一つの鼓動を與へた。その

ある過ぎ去つた事實が、夕映が堇色の空氣の中に溶け去つてもなほ歇まぬ風のやうに起つた。平たい湖のやうな平原の端に起伏して、ゆつたりと削つたやうに連つてゐる岳がある。その岳の上からは半里を隔てず、私の故郷の市街が數少ない烟突の吐く薄黒い烟ではかされてゐるのが觀へる。重疊してゐる市街の疎密の音響は唸をませて流れくる風のまにまに聞えてきた。その風は悶々さすやうに椎や栗やの梢を涙のやうに動かし、日光はよく初春の暖かさを軟かな芝生の上に注いだ。薩摩薯の枯蔓の中からもつこりと浮上つた、黒いしつとりした土は表べを心持ち黄色に乾かして、段々に岡の斜面を直角に切り込んだ畑々には星のやうに夾がい青麥の芽が細細と忍ぶやうに首を上げてあたりを望んでゐた。二月の日光を浴びて枯莖の白い中に横臥してゐた私の少年は右に傾き斜に伏して何かの力を遁れやうとするやうな體をしてゐた。

「たい、何を考へてゐる」

「友よ」汝は私が斯く靜かに寂しさに堪へ兼ねて呼んだ言葉をおぼえて記憶ゐること、想ふ。——何處へか誘惑を試みんとし、じけ、じけに響く戸外の足音がふと私の扉の前に止まつて、白い把手ハンドルの首を振つて初めて出した聲のやうに友が答へて振むいた時に適かに軋つて行く國道の車輪、有るか無きかに遠ざかり行く流れの音——足の下に小さい河が流れてゐた——は溶け去つてふはりと暖い感覺が指頭に觸れたやうで、春は五本の指から起るやうに想れた。

「歸らうか」私は憎さげに自身に言つて見た。

「今夜も亦、あのあの盲者めくらのあとをつけて行きますか」若い盲目の女は凝り堅まつたやうな聲を出してよく、街はづれの馬車馬のごた／＼した間を。重さうに三昧をかゝへて流して行つた。私は、深い深い慟哭に沈め

て、限らない情緒の深みから自分を反撥してくれる新内の調子に乗せられて、幾夜も打續けて、輕き痙攣を起す盲者の顔を凝視めたのだあつた。

「僕はまた不思議でならぬことがある。毎晩あの女の後からついて、有頂天に歩いてる内にね此奴何處の奴が、何處處に宿るかと思届けたいと思届けたいと思ふことがあるがな、一度も目的を達したことがない。

一曲二曲と聞いて追つて行く内、自分の知らぬ間に何處かで消れてしまふ……………」

「私も一所に今日は行つて見やう」

友は微笑を漏して、輕い鼻息をついた。「何と美しい眼だらう」私は胸にかう云つた。碧い空のやうな、絶頂の初雪のやうな、明眸は嚴いまで清純な光を興へる。吾々はかくて、無言の内に総てを語り盡したやうな氣分になられた。そして絶對の感じは語るに由ない。語る時唇は閉されやうとするのだ。自由に黙つて身内を見透さす外はないのであつた。

斯くいつも吾々は丘に登つて林を出ては底まで清冽な小川の流に沿ふて満足に歸つて行つた。私は解けて、のびれて踏みしだかれた様な心臓を抱いて、銀のやうな音を立て、刷刀の様に流れる水を眺むるまに、醜い細い手が少年の襟頸にかゝつてゐるのを知らなかつた。ある古い物の本に讀んだことがある。人が生れて幼い時分には心が大人びたところがあるが、その心は日が立つて行くにつれて若やいで行く。が身体はその反對に漸々に老ばれてゆくので、前者は人生の喜劇で後者は悲劇であるとのことだ、自分も此の喜劇と悲劇との間に、悲しく半ば意識しながらもこの明眸の子に別れるやうになつた。

斯く單純な追憶に耽つてゐると、浮上つた月は松原を青白い面帕に包むで、夜の闇黒と魔の秘密はごん／＼と淋しい海面を限りなく逃けて行つた。

三

自分が今語つてゐる所は博多灣を猿臂のやうにそりかこんだ海の中道の鼻になつてゐる、西戸崎だといふことは殆ど想像せるであらう。唯夏の間の海水浴のためにたてられたと想はれる草ぶきの家が灣に面した海岸にばらばらに建築せられてゐる。私の宿つてゐるのは、其の間の中心になつてゐる。松濤館と云ふ鹽湯である。可成浴客もあると見えていつも五六人の仲働がある。私の部屋は硝子窓で、夜になつても暗い海がのぞかれて怕いこともある。——暗い部屋のうちに腫をかへすと暗い疊の上に燈もつけず妹が坐つてゐる。

浴衣の蝶々が大きく膝に息むでゐる。

「たい暗い、洋燈をもつてこい」

「蠟燭がいでせう……」

「月を見るのだからそれでもいい」

凭う言ひながら母が居らぬのに氣がついた。そして蠟燭は頗る似つかはしいと想つた。光に照らされた潮は眞黒にさわぎ立てる。

「た母さんはどつちかい」

「母屋の方よ、鹽湯の御内儀さんが月見の宴をはるからつて」

「風流な婆だな」

それには答へないで、妹の廂が少し傾いて何物か聞くやうなそぶりをして、

「それ三昧が聞かせよう……五郎がひいてきかせると流元ながもとで云つてゐました」……

聽て陸から吹く風と海から寄する風が申合せたやうに止まる、乖燭の蠟燭は眞直に燭を上げてゐる。蟠つた空氣を徹して三昧の音がむしろ泣くやうに響いてくる。徹つた歌と、連つて起る笑も聞える。私は尺八をとつて吹き出した。鳴るとしもなく微かすかに共鳴るものがある。それが床の間の古琴の絲の空鳴りだと氣がつくと何だか妙にまらなくなつた。月が昂まるにつれて簾の間から縁の上に波紋を畫く、あたりが冷めてくる。霧が出て家のところまで寄せる、皆浮いてゐるやうだ。

海面は徐ろに獸の様な呼吸をつき初めた。月光は霧を通して開かけれた玻璃窓の邊に徐觸げてゐる。只假初めに眠と死の間に横つた様な世界である。松原を越へて玄海の潮音も追々高鳴つてくる。

「玄海が荒れたした」

「昨夜はあれでよく寝られなかつた」と妹は起立つて押入の方に縫物をとりに行つた。燭の光と月の光とが縋れてゐるあたり妹の浴衣の揚羽が岩疊な蝙蝠の様な翼を廣げてゐる。

「蝶々がまるで蝙蝠の様だ」

「少し派手だから家うちちでの平常着ふだんぎにしてよ」

「何處かの小説にそんなことを云ふ奥様があつた」

「さう」

と静かに歩みよつた、

浴衣には焦茶色の博多の單衣帶がキリツと結んである。遠くで水の相揪つ音が荐りになつてきた。岬の鼻の棧橋から靜に動き出した帆前船が小さい青い燈火をマストに上げた。私は強いらるゝまゝに古い物語を語り出した。

北伊太利バツアの煉瓦の高塀に圍まれた牢獄の鐵扉の前に、五人の獄卒の靴音が高々と冷やかい壁に響た。その靴音が壁と壁とに木靈を起して、暗い長い廊廓を消え失せると、五人の獄卒は間もなく、不謹慎にも潜ませた酒瓶を取り出し傍の机の角で骰子を振り初めた。靜かな暗い夜である。小さい骰子の轉がる音と引き續いて起る、笑ひ叫びは薄汚れない彼等の頬鬚を搖蕩かして意知惡き人々の情慾を偲はしむる様な容貌が骰子の響に變り行くのであつた。一人の獄卒が叫んだ。

わゝい、靜にしろ、囚人が目を覺ますと好くない、今丁度眠つてゐるからな。

莫伽を云へ。覺めたつてどうあるものか。首をはねられたら纏つくり眠りが出来るといふ様なものだ。

文なしで素寒貧の俺等を殺すとするとまア罪をつくると謂ふものだが、公爵様を殺すのは法にさう逆うものではあるまいッて。

尤もだ、惡賢い公爵様だつたのう。

あの囚人といふのは何歳位だ。

惡らをやるには遅し賢くなるには早いと云ふ年頃だ。

公爵夫人が擁護になるといふ評番だせ。

それは好い思付だ。公爵夫人には出来ぬものとはあるまい。

一旦たん話が終つて五人が黙ると堅く閉れた扉の中に眠つてゐる青年の寢呼吸がはつきり聞かるゝ位夜は静かに深まつて行く。處に流るゝ水のやうな衣摩きぬすれと、白魚の跳る様な小さい足音が獸のやうな獄卒の耳を怪げに叩いた。五人の人々は悚然として立つた。傍の小門ウイックツトを透して頭だけ出して見れば、美しい寶石に被はれた女性である、異薫がバツトあたりに漲つた。獄卒は互に私語き合つた。

美しい女性のやうだな。

まだ分らぬ、假面をかぶつてゐる。

假面をつける女の顔はだしぬいで美しいか又は醜い奴に限つてゐる。

繼順に獄卒は戸を開いた。美しい物は強い。彼等は最も拘はれ易い的人間であつた。

女は静かに悲嘆と警愕とを一時に味ひ乍らも、美しいものに對しての飢渴を裏ぎるやうな氣分の足どりで、暗い暗い牢獄をも悠遠な藝術の境に入るやうな悦樂の面影を姿の何處にか宿してゐた。而しそれはほんの直覺的に感ぜられる一種のトリンで、再び考へ直す間にはどこへやら隠れてしまつて、悲嘆と驚愕の外には何物をも認め得られなかつた。それに拘はらず女は埃及の皇帝の女のやうに縊てに凝つた華奢な扮装であつた。

妾は囚人に會はなければなりません。

女の聲は鷹揚であつたが下の言葉はもつれてゐた。獄卒の一人は女から受けた指輪を凝視した。そして其の指輪を靜に再び女にかへして軽く一禮した。指輪は素のやう豊やかな女の指に光つた。

是の指輪があれば出入で入りに事はかけませぬ。それは公爵夫人の御指輪で御座いまするな。

斯う言つて獄卒は皆外に立つた。覆面の姿は妙に獄卒の心をそゝつた。腕を飾る碧玉、髪を彩る雲斑石、殊に白い柔軟な素手は最も怪まれる限であつた。

窓とも名づけられぬ小さい穴から青白い月光が莊重な石造の廊殿を照してゐる。室の戸を排した女の衣づれは堅い鐵のやうな沈黙に吸ひとらへてしまつた。女はそつと假面を脱いた、月光は錆びてその半面を照らしてゐる。女は石のやうに突立つて考へ入つた。遂う遂うやつてきた。あの人は是れでた逃れになることができた。是の外衣と假面と、妾はどうなつても好い。あの方は妾を呪つてゐらつしやるのであらう。妾が悪かつた。悪かつた。是の一時間の餘裕のあひだにさうだ……

女はテーブルの所に歩み寄つた。テーブルの上の壺には青色の水が半ば入つてゐる。

毒だ。……毒だとして何の不思議があらう。處が處だもの。總ての哲學に對する鍵が是の中に浮いてゐる。あゝ罌粟の香がする。妾がシシリーにゐた時分の頃が想ひでらるゝ。妾は花園から赤い虞美人をもつて小さい冠をつくつた程にナボリの叔父様がた笑ひなされた。あゝ人の世の春を飾るこの花が心の臓の鼓動を止め、血管の赤い血潮を止めて、人の魂を烟のやうに何處にかもつて行くのだ。人の魂、天にあがるか地獄に下るのか。あゝ妾のものは何處に逝くのだらう。

儚ない想に亂れて女は壁から火把を取り下ろして、寢臺の方に歩いて行つた。罪びとは安らかに眠つてゐる。學童が遊に倦れた日の様に。女は腰をかぎめた外衣は寢臺を蓋はうとした。

否々妾の此の燃わてゐる唇は火の如うに焼いて終うのかもしれない。

女は啖吻を止めて懸て遠のいた。白い素足は這るが如く再びテーブルの所まできた。肩に柔らく垂れかゝつ

たブロントの髪は青白い月光に銀の如くに光つた。重く垂れてゐる白衣の外袍は大理石にさざめる襞のやうに少しも動かぬ。唯わななく手腕は白魚の如く虚空を游いて、儚なくも青色のフラスコを握つたと見るまに青い液体の餘滴は逸樂的な紅唇から迸つた。暫時の急激な働作は早くも罪人の安眠を奪つて驚いて起たしめる。烟れる月光の間に鍾のやうな沈黙が續く。戀するものゝ瞳は輝いた。辨解と勸告と謝罪の爲めに費される女の舌は大蛇の舌のやうに燃わる。

さあ、是に衣ど、假面が御座います、今の内に逃れられたが好う御座います。あの門をでゝ左手に御回りになつたら橋がありませう、一つ二つ目の橋の際に白馬が繫いで御座いますから、直ぐさまヴェニスへ。何故に黙つてゐらつしやります。躊躇くしてゐては首が飛ばうといふ夜に、御了解になりましたか。さあ是に指輪が御座います、月が汗へてゐます、白馬がまつてゐます——二つ目の橋際に。男は指輪をとつて啖吻した。

有難う。

バツアを去られますか。

いえ、逃れます。

今夜の中に。

今外の月影をふんで。

ねえ早うなさいませ。

罪人は而し愛人の眼を見て躊躇つた。黒礁礁に様に底光る瞳に愛執の邪念が起らぬ譯にゆかなかつた。自

分が去れば、是の女の罪はあばかる、あばかるれば命は斷頭臺の一撃に絶てて終はう。男は想に餘つて目迷ふがやうに女の足下に倒れた。

私の女よ、私の戀よ、黄金の髪、紅の唇、人の世の誘惑と戀のために作られたたゞ顔容よ、純潔な愛の精よ、あなたのために私の過去は忘れられ、私の心は神の様に想はれました。例へギロチンに命はたゞれても、私の想は長く長く……。

二人は互に誘ひ惑はす悪魔であつた。悪魔は幸なると人の云ふ世を地獄となした。二人の話は長かつた。女の「逃れよ」といふ口の下に容赦ない時の小車は回つて既に遅かつた。耳を傾けよ、莊重な廻廊の沈黙は今又破られてゐる。何と獄卒の引きづる靴音の重さよ。裁判官の足音も交つて軽く聞かるゝではないか、火把はまた高く上げられて油煙は清い銀光を流した。

既に遅い。

一人の獄卒は尖れる斧を肩に荷つて廻廊を渡つて行くのが見える、僧侶達も燭をもつて靜に従つてゐる。

たゞ愛人よさらば、私は是の毒を飲まねばなりません、私は何も恐れぬ、冷かに臺の上に一人横つても悔いるところはありません、(テーブルの所に歩み行きフラスコを見て)何だ空虚か。吝嗇な獄卒奴、たゞ毒さへ吝みやがつたな、

獄卒に何の罪がありません。

たゞ貴女はこれを飲まれてか。

若き囚人の心は躍つた。彼れは恨めしげに一滴も残つてないフラスコを打ちまもつた。女は彼の死を願は

ぬ、男は目からの死を想ふ。男は重ねて共に死せん事を願ふ、女は二人にしてはあまり狭き墓床はかどこを悲む、悲劇は追々終結を告げる。

たゞ妾等はこうして此にゐるのでせう、この部屋は貧しいが妾等の結婚の室になつたので御座います、さあ一所にのがれませう、馬は何處にゐるのでせう。今やウエニスに行く——寒い夜で御座いますことね、泣いてはなりませんぬ、吾等は、た互に愛しあつてゐるのですもの、それで充分で御座います。さあ赤葡萄酒の杯を上げませう、毒では御座いませぬ。

廳で男は獸の様に立ち上つた、兩人は初めて口をあはした。時に突然女は死の痙攣のためにとび上つて苦しみのあまり衣を裂いて、遂に椅子に倒れかゝつた。男は女の帯から短刀を取り出すと見たが反す刀に自らを屠つた。そして女の膝に斜にたをれて、椅子の背にあつた衣をとつて、それを女の上に蓋つた。暫時の靜寂。廳で獄卒の足音。鐵の扉は半ば開いた。死人の顔には喜びがあつた。

私は話し終つて撫然とした、妹は遠い遠い旅から歸つてきた人のやうに殊更に大きな眼を睜つてゐた、意味が好く解せぬらしい、話も拙い、事柄も突然だ。一つの妙らしい建築の裏門だけ見せて置いて「わい分つたか」と尋ねると同じ事だからである。

「何だか錦繪のちぎれを見るやうね……何うして獄屋に這入つたの……」

「初め女が男のために死なうとした、それだけは分つたのかい」

「だつて何故死ぢやつたのか分らないわ」

「女といふのは公爵夫人の装したのだ。そして公爵夫人は、若い男に戀してゐる。男も女を惡むでは居ら

ぬ。

「そして」

「そして、女は自分の夫の公爵を殺した、公爵は腹黒い人であつたのだ、そして公爵はその男の敵といふことを忘れてはいかんよ」

「何故」

「何故ツて、公爵は男の親を斷頭臺に乗せたのだもの」

「まあ……少し意味が分つてきやうだ」

「さうだらう。初め男に其の親を教へた奴があつた。教へた所はバツアの市場で、ローマネスクの建築、白や墨の大理石で作られ建物を背負つてゐる午後の市場だつた、カセドラルに導いてゐる大理石の階段の下には二匹の獅子の彫物が見えてゐる。左手には、公侯の泉があつて青銅のトリトンがあるせ。時は丁度晝頃だつた、そしてカセドラルの鈴が鳴つてゐたツてことだ」

「其處ことは何うでもないのよ」

「いゝのよではない、さう言ふ時にさう云ふ處でその親を教へた奴が來なければ今のような面白い話もなからうぜ」

「それはさうだけれども」

「それから其の人の入れ智恵で公爵の小姓になつたが、聽て今の様な始末、夫人と小姓の間に怪しい腫が光つたんだ。親を教へてやつたのが、それを知つて注意した時は既に遅い、階段の上に寢室の緞帳が柔かい織

手に排せられて白い寝巻が赤く染つて、呻きの聲は暫の間續いたのだつた。階段を飛び下つた夫人の手に七首が銀のやうに光つた。」

「男は何故獄に入りました」

「女が暫し詐つたから。怪しまれたのは男だつたのだ。先づ裁判が開かれる。そして——凭座處を詳しく話すと面白いがな」

「そして先きの様になるの、道理で假面の女が扉を排けてきた時に男に訛言を言つたのだわね」

「うむ、面白かつたかい」

「兄さんの話方が悪い」

私は何度となく種々の人に此の物語を語つたが語る毎に何時も多少の昂奮を感じた。骨牌の女王クイーンの眼の青く澄きつて、迥かに立つてゐる常盤木の一枚一枚の木葉が數へらるゝ様に透つたといふ、あの伊太利にして是の物語り、自分は脈膊の上に心よい感觸を感ずるのであつた。語つてゐる内に少し夜も更けたやうだ、母屋の方の三味も止んだ、月は上つて最早軒に入つてこぬ。燭の光に部屋は牢獄の如くに沈んでゐる。

四

海水浴に来て九日目になる。起きて見ると、今日も天氣がいよ。母と妹と隣の御内儀さんは志賀島に出掛た、自分は少し本を讀んで見やうと態と好んで留守番を願ひ出たのだつた。昨夜母の歸つて來たのが九時半、それから亦家の話や親戚の話やで夜を深かしたので頭が浮んだ様に、水腫でもした様に感んずる。だるくて熱氣があつて尻が疊についてゐないやうだ、寢汗に濕つて疲れ切つた眼を醒ましたのは三時頃でもあつたら

う、暗いながらも蚊帳のまわりに怕い顔がズラリと並んでゐるやうに想はれて、ゾットとした、眼をツブツても耳がさゆる幾重にも轉がる玄海の波が怒號するまに、何か魔性がさゝやくやうに想はれる。……ドツドツドツと人の足音が戸外に聞える。囚人を衛る獄卒の覺音のやうに凄愴な諧調を刻むで走つてゐる。蟲の音が遠くて聞えるかと想ふと床下で鳴く、はたまた一時にどつと泣き出し小さい自分の家を浮べて行くやうに、ツートたる様に家をもつて行く、危い崖の上にまでもつて行かうとする。下には大きな浪が打つてゐる。——灣の隅々から寄せる黒い潮が相揪つて暫く靜まると、灣一体が大きな巨人の顔のやうに見える。と松原を距てゝ高嘲る玄海の音がすると松原は襲はれた様に震へる、内港は水に無數の龜裂を生じ、龜裂は蛇となつて蟠まつてゐる。わゝ戸を摘く音がする。戸が破れやうとする程に潮はずん／＼高まる。怪けな光が海底に光つてゐる。

「わゝ——い、わゝ——い」自分を呼んでゐるのではないか。

「潮だ——」

自分は悚然としてはね起きた、海嘯が寄せてゐる。戸ががた／＼と鳴つて水に壓せられてゐる。物が言へない、母も呼べぬ妹も起されぬ、ドツと戸を排して表に出た、提灯をともして人は縦横に走つてゐる。海は荒れてゐる様のものゝ海嘯でも何でもありそうでない。自分は裸体のまゝである。走る人に飛びすがつて聞いて見る。

「海嘯ですか——」

「否否身投です」

自分は安心したやうのものゝまた驚いて一所にかけ出した。棧橋の石炭庫から一町ばかり下に澤山の人が寄

つて焚火してゐる。さういふ冷たい空氣を通して夢のやうに襲つてくる。

群集を分けて見た。二人の男女が藪の上に横になつてゐる。出張所の警官は醫師と同行で一つ一つ検査べてゐる。男の呼吸は通つてゐる様だ。

警官はコミカルな威權をとつて傍の人に云つた。

「男の住所は何處だ」

「福岡縣糟谷郡志賀島千六十番地」

「姓名は」

「濱崎熊造」

「女の方は知らぬか」

「女の方は存じませぬ」

「詐りを申すと其のすちの處分があるぞ」

「ほんまに知りませんで」

「た前は男と何かの關係があるか」

「關係と申しますと——その何で……近所の者で御座いますへい」

警官の青表紙のノートは確と閉ざされた。そして醫師らしい人と相談して四五人の人足に二三言云つた。人足は擔荷の用意をした。警官のサーベルが提灯の火に光つた人々は砂を踏んで山手の方に去つた。四五人の擔荷を負つて行く人足と群集は風の吹く夜を寂しく人家の方に消えて行つた。

擔荷から女の二の腕が青白く下がつてゐた。其の他は群集と夜のために何物をも充分に認められなかつた。

自分は唯默然として立ち乍ら提灯を彼方へ見送つた。白い引幕を掲げる様に、曉に近い夏の夜は水底の様に靜かに靜かに、人事の動變を蔑むが如く明になりそめた。水面には暗い魔物のやうな影が湧いた。自分は思はずしつとりと露に濡れた衣をかき合せた。オリオン星と大狼星が怪しい光を海底に投じて、渦まく海潮は急激に大圈を畫いて囀つてゐる。岸邊の夜光虫は反射鏡を備へた洋燈のやうに底に光つてゐる。怕しい風はそれから起つて凄まじい幻影を強烈な輪廓に畫いてくるのであつた。夜光虫はまだ人魚の飛躍のために輝いた鱗のやうに、盤紆^{うか}つて行く波浪は南海の鰐魚の様に想はれた。さういふ景色が漸次に日光の侵潤をうけて薄明の象を得つゝあるといふ事が病的に恐怖を増してきたのであつた。壓迫といふ文字がかゝる場合に用ゐらるゝとしたら、最も適當したシムボルの様に考へらるゝ。自然の上に掠奪を姿にする嵐に瀕氣は搖蕩してゐながらも猶石造のやうに堅く沈んでゐる。犇々と胸壁を壓する、無意味な泪は流るゝ。私は寒さに堪へず宿に歸つてきた、そして衣をきて再びもとの處にきてそこから歩み初めた。濕つてゐる砂が木履の背を沒する。砂を刻むでゆく足音が何かしら早朝といふ感にシンバセーをもつてゐるやうに想はれる。シンバセーといふと昨夜の話と今朝の出來事にも何かシンバセーがある様に想へる。私はかゝる現象の間に美を認め怪異を發見するやに教はつてきたものである。普通世のなかに云はるゝ美とか偶た學者達に呼ばれる巧緻とかいふ範圍をモット自田に考へて自分を一種のエクスタシーに通はしめる現象を見たり、聞たり、感じたりするときには、頭か颯風に卷かれたやうな、さもないければ恍惚として夢に襲はれたややうな感情に支配せられる。そしてときに軽く爽快に、または微かに水晶のやうに芝草の間を流るゝ水のやうな震へを覺ゆる。かういふ

ときにこういう美に對して心から世間をはなれないで、プロダクションといふ野暮な尺度でバーンナリターを評價しやうとするものは俗物だ。^{フリスチン}

情緒のための情緒は藝術のチームである。アクションのための情緒をとつて自分達今朝偶々見た現象の主人公になるとすると考へる時には、人は誰れでも大きな聲で「莫伽」を絶叫するに違ひない、——人生のチームになつてゐるからである。

かゝる場合になると私は自分の周囲の影響といふものが考へに浮んでくる。或人は泣いてくれる。或人は笑つてくれる。或人は嘲つてくれる。——かゝる事實が何事をも試験的にみやうとする私には特種の興味を湧く。かくして恒に想像的な藝術の静かな權威の中に自分の汚濁な感情生活の鏡を得やうと欲する。そして平生人の蒙つてゐて常に真面目な人々に呪はれ勝ちである假面といふものが無上に有利な興味あるものゝやうに想はれる。——自分の蒙つてゐる假面と全く乖離した生活を巧みに營むで行くことは、人生直接の困難を解決するといふ問題に魅力を感じなくなつた私には最も人工的な——然るが故に尊い——藝術の側面だと想ふ、他の人々を甘く欺むいて影に廻つて白い齒をむいて冷笑してやりたく想ふのであるが少くとも他の人々が莫伽で鈍問だと考へたくはない、——自分の藝術を尊重するために。

私は唯若い遊治郎の氣持ちが戀しいのである。遊治郎といふ奴はあることを成し遂げやうとする意志を呼び起さない、寧ろたゞあるもの (Some body) たらんと求めるのみだ。彼等にとつて人生は藝術で、人生の様式はそれをエキスプレスしやうとする藝術に外ならぬのだ。

色々考へが續いてくる。総体、虚言のための、虚言、情緒のための情緒とかいふものは最も遊離的な天國的

の美しさをもつてゐるものだ。

しかし美にかはりはない、音楽に就て眞なるものは他の總ての藝術のところへもつて行つても眞たるを失はない。美は人の氣分と同じく種々の意味をもつてゐる。美は總てのものをあらはさうとするだから何物をも表はさないやうに想はれる。又シムボルのシムボルだと云つてもいい。美が自らを吾人の前に示す時は全く火のやうに彩つた世界を見せてくれる。

コンベンセーションといふ程のことは凡ての事物現象に行はれてゐる。それで美といふものも或る事物現象の半面だと想はれることは、至當の見解であらうと想ふ。そこで私の言はねばならぬことがある。ある問題をどつて其の兩面を見やうとする人は絶對に何物もみない人である。殊に藝術の場合にさうである。藝術はパッションである。藝術にねける思想はきつと情緒に彩られてゐるのだ。そして固着してゐると云ふより、流動してゐると云つたがいゝ。靜かな藝術にもかげろ、うのやうに搖蕩たゆたつてゐる美がある。それで美に依てうごく情緒は最も謀叛氣ある一面を隠し得ないのだ。藝術に於ける思想は美しい氣分と優秀な瞬間に依つてゐて峻嚴な科學の形式や神學上のトグマに陥らうとしない。種々いろいろと想つてゐる内にかういふ事も自分にとつて何かの辨解ではないかと想つて寂しかつた。

五

松原の間を縫つて宿に歸つた時は、星影はうすらぎ嵐も浪も止んで平日の様であつた。眞赤な大きい太陽は極度の情熱を以て世界を抱き初めた。妹も母も起きて湯に這入つて居た時であつた。

暫くすると妹が湯上りの楚々たる姿でやつてきた。

「夜中からとび出したのね」

「夜中からとび出した」

「何うしたの」

「何うもしない——今朝身投げがあつたよ」

「まあ……」

妹は吃驚してゐる。妹は常に驚く、否女は常に驚く誰れかど云つたやうに、思想のために倦かず、抽象を怕れず、寂寞と相合するを得る若い女性が少ないからである。妹は朝飯の間も母と其のことに就て語つてゐた。臆測と揣摩が交る交る相亂れた。

そしてからが志賀島行の話がでた。隣の御内儀がきて直に賛成した。歸りには舟で宿の下までくるさうである。女は皆白足袋に草履で行つた。自分は禪房に残された様に書を読みかゝつたが頭が急に痛くなつて、手を頭の後に組んで後に倒れた。天井がくるくると回轉する。何時の間にか眠に入つた。

十時頃になつて郵便局長の娘の静枝さんがやつてきた。去年も今年も此の娘が一人で毎日適々どやつてきた旅人を賑合した。

「まだたやすみ？」と十四歳の女には大人びてゐる。私はうどくとして夢みてゐた處であつた。起されて吃驚して起上つた。

「一度起きてまた寝たところ」

「嘘ばつかし」

「静枝さん、僕あ今日のひるから歸るよ」

「嘘ぢあないの」

「嘘ぢころか」

「姉さんそればさんは」

「今志賀島に出て行つた。僕は黙つて内證でかへるから誰にも云はないやうにね」

「ひどいわ、是の人は」

私は何もかも厭になつて歸省の準備をした、準備と云つたつて三四冊の本と尺八に寫眞帖これだけを包むばかりである。留守の間に歸つて、驚かしてやらうと發作的な考へが眠つてゐる間に浮んだのである。静枝は廳で仕方なしに歸つて行つた。自分の歸るのを本當の事實とは考へて居らぬらしい。私は病的に、故郷の無賴な少年の群が戀しくなつた。町はづれの仕立屋の二階に薄きたない火鉢をかこんで、林のやうに卷蕨のからを突き立て、何を今頃計畫してゐるのであらうかと想ふと私は靜に坐つて讀書なんかの餘裕はない。……

私は午後の一時の汽車で出立と決定した。死人が墓石のもとから蘇生して、俗世間の評判を立聞く様に不意に歸つて行つて階段の足音を低めて、突然破れる様なノックを與へてやらう。海は透つた空氣の下に一つの痙攣をさへ起さうとしなかつた。

(完)

先生游南鎮、一友指巖中華樹、問曰天下無心外之物、如此華樹、在深山中、自開自落、於我心亦何相關、先生

曰儼來看此華、時此華與汝心、同歸於寂、儼來看此華時、則此華顏色一時明白起來、便知此華不在儼的心外、